

第三章 コソアの基本義

3.1 はじめに

指示機能を持つコソアの一貫的な説明を求めるには、認知言語学の観点の有効だと思われる。

まず、指示機能を持つコソアは指し示す物事がどこに存在するかによって、大まかに、「現場指示」、「文脈指示」、「観念指示」に分けられる。この三つの関係は、空間から時間へ、さらに話し手の心的態度へ拡張していくという一種のメタファー¹と見ることができ、コソアの使い分けもそれぞれ共通するスキーマがあると想定できるだろう。「現場」「文脈」「観念」の時空関係を以下の表1で示す。

表1：現場指示、文脈指示と観念指示の時空関係

	説明	時空関係
現場指示	指し示す物事は「現場」と「現在」に存在する	[+空間 +時間]
文脈指示	指し示すものは「現場」に存在しないが、前後文脈に存在することで、時間と関わる。	[-空間 +時間]
観念指示	指し示すものは「現場」にも前後文脈にもない。話し手の観念にしか存在しない。	[-空間 -時間]

指示機能を持つコソアの使い分けの統一的な説明について、「談話における文脈指示」と「観念指示」は「現場指示」からの拡張だと見るのは春木(1991)、吉本(1992)、金水・田窪(1990、1992)などである。

しかし、「文章における文脈指示」の場合、現場指示との関係は不明な点はまだ多い。庵(1995a、1997)はテキストの結束性の観点から、「現場指示」と違う基準のモデルを提出しているが、堤(2002a)は「談話における文脈指示」であれ、「文章における文脈指示」であれ、すべての指示用法は同じ基準に基づくと主張し自らのモデルを提出している。

本稿は、現場指示と文脈指示におけるコソアが空間と時間の拡張関係であると考えゆえ、統一的な基準に基づくという立場を取る。先行研究により様々な角度からコソアの使い分けを整理したが、「現場指示」、「談話における文脈

¹ 本論では「指示機能が曖昧なコソア」を「指示機能を持つコソア」の拡張事例と見ため、「指示機能を持つコソア」がプロトタイプであると考え。しかし、「指示機能を持つコソア」はすべて均質的であるわけではなく、空間から時間への拡張関係が見られる場合が多い。「指示機能を持つコソア」は「指示機能が曖昧なコソア」に比べて確かにプロトタイプだと言えるが、実際にはその内部にも階層性が見られる。

指示」、「文章における文脈指示」と「観念指示」に共通する基本義があるかどうかについてまだはっきり言えないであろう。本章では、これらの指示におけるコソアの意味素性を分析して、それぞれ共通したスキーマを抽出することを目標とする。

3.2 コの基本義

3.2.1 コ系語の意味素性—[+話者圏内][+近]—

現場指示の場合、距離区分説であれ、人称区分説であれ、表2でまとめたようにコ系語は「話し手に近い」点が共通していると言えるだろう。

表2：現場コの意味素性

分類	説明	意味素性
融合型 (距離区分説)	話し手の縄張り(聞き手を含むこともある)	[+S (+H)][+近]
対立型 (人称区分説)	話し手(聞き手を含まない)の縄張り	[+S -H][+近]

談話文脈のコについて久野(1973)は、目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に使われるようで、現場指示の色彩が強いとしている。談話文脈におけるコの使い方は、現場指示のコから由来していると言えよう。

文章文脈指示の場合、コとソの使い分けが中心的であるが、「コ」の使用制限が多い²故、有標と言えるだろう。金水・田窪(1990)は文脈指示のコを「解説のコ」と「視点遊離のコ」に分け、「文脈指示」として有標であり、一種の現場指示と考えている。先行文献から以下のようにまとめることができる。

①テキストのテーマとの関連性

- (a) 言い換えができる。(庵 1995a、1997)
- (b) 顕著的(正保 1981、吉本 1992) ⇨ トピック(庵 1995a、1997)
- (c) 解説的(金水・田窪 1990)

「テキストのテーマとの関連性」は以上の三つの特徴が見られる。「テーマ」とは文脈の中で一番卓立している物事を指すので「テキストのトピック」と言い換えできるだろう。つまり、コ系語は単なる先行文脈に存在する先行詞ではなく、一番卓立的な先行詞を指しているのである。

逆に考えると一番卓立的な先行詞を指示するのに、現場指示で一番認知しやすい物事を指し示すコ系統を使うのは、無理がないと思われる。

² 庵(1995a)から、指定指示の場合、コとソが潜在的に交替することができるのに対し、単一文の代行指示の場合、「コ」の使用が非常に限られていることが分かった。

(2) 私はコーヒーが好きだ。この飲み物は疲れを癒してくれる。(庵 1995a : 620)

(3) 私には、酒好という変わった名前の友人がいる。この人は、名前とは逆に一滴も酒が飲めない。(金水・田窪 1990)

例 (2) の照応詞「この飲み物」は、「コーヒーという飲み物」と置き換えられる。庵 (1995a) によると、照応詞が先行詞の置き換えであれば、「この」の使用は義務的であるという。例 (3) は先行文脈のあるまとまった内容についての説明・解説をするために、導入した物事を指し示す例である。

本稿は「テーマ性」が話し手の縄張りに関わるので、現場指示のコと関連すると考える。その理由は、コ系統を使うことによって、話し手が積極的に先行詞を自分の縄張り（作業領域）に引き込み、特別な働きを施すことができるからである。文章と段落のトピックが関わっていると感じられるのは、先行詞（後行詞も含む）にスポットライトを当て、人の注意を向けさせる効果によると考えられる。

②現場性、直示性（未来や仮説の時に使わない）

(a) 実質的（吉本 1992）、確定的・充実的性格（馬場 2006）

(b) 後方指示（建石 2005、正保 1981、吉本 1992、金水・田窪 1990、1992 など）

実質的・充実的な性格というのは、すでに発生したことと、はっきりしていることしか指せない性格である。

コ系語には「話し手が存在する現在を含む前後時間」、「話し手の居場所を含む場所」という絶対指示的用法の機能を持っている。いわば、「現場」と「現在」を指す。

「現場」と「現在」を表すコ系統は、今処理可能な「作業領域」である。その領域はまさに、話し手が存在している話し手の縄張りである。このことは、前後文脈の確定的でないものや、まだ実現していない事物などに対しては、コで指せないという事実からも明らかであろう。

金水・田窪 (1990、1992) も目前にはないが、まるで目の前に存在しているような「時間のズレのある直示」を後方指示と連続していると考えている。

(4) (薬屋で) 鼻風邪でしたら、こんな薬がありますよ。(と言いながら薬を客の前に出す) (金水・田窪 1990 : 141)

(5) この話は山下君に聞いたけど、適当な運動は体にいいらしいよ。
(建石 2005 : 36)

③感情移入の技法：視点遊離のコ系語

金水・田窪 (1990) は小説や体験談などで、視聴者の視点に対する共感を呼ぶために使われる「視点遊離のコ」を提示している。それは、話し手の視点を

自由に話中の登場人物に近づける一種のテクニックである。コを使うことによって、話し手が聞き手（視聴者、読者）を自分の縄張りに引き込むことができる。また、話し手（語り手）の視点と登場人物の視点を一致させることによって、聞き手（読み手）に臨場感を与えることもできる。

文脈指示の機能は、単なる先行詞を指示するだけではなく、指示機能以外に、「+α」の機能が存在すると考えられる。その「+α」はコソアの基本的な意味素性に関わると考える。

文脈指示のコの「+α」は「話し手に近い（話し手の勢力範囲）」による点で現場指示のコと連続している。

以上の使い方をまとめると、次のようになる。

- (6) 現場コ = [+話し手に近い空間 ±聞き手に近い空間]
 非現場コ = [+話し手に近い時間 ±聞き手に近い時間]

3.2.2 コのスキーマ・ネットワーク—話者が感知できる近い物事—

現場指示のコをプロトタイプ的な使い方と、非現場指示（文脈指示と観念指示を含む）のコを拡張事例と見ると、以下のような関係が示される。

- (7) スキーマ：話し手に近い（距離説と人称説が共通する）
 プロトタイプ：話し手に近い空間（にある物事）
 拡張事例：話し手に近い時間³（にある物事、文脈）

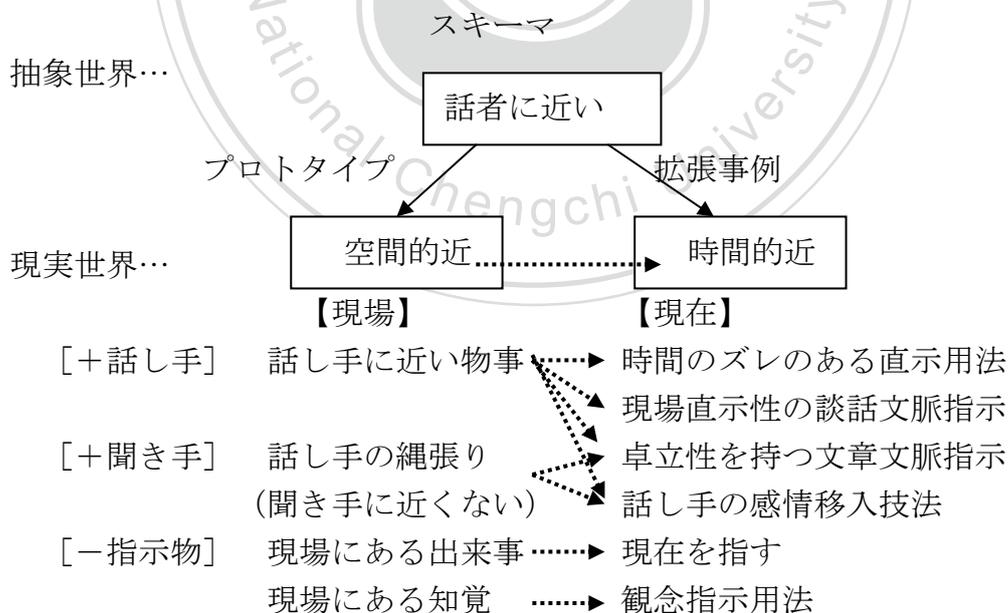


図1：コスキーマ・ネットワーク

³ 本稿が定義する「話し手に近い時間」とは「今、現在」であり、また、話し手が存在する時間を含めて、「現在からの時間」と「現在までの時間」も含まれている。

本稿は基本義を、「カテゴリー内でもっとも代表的な、中心的な意味」と定義する。いわゆる最もプロトタイプ的な意味を指す。コ系語の意味素性は[+話者圏][+近い]である故、基本義を「話者が感知できる近い物事を指し示す」と定義したい。

また、コ系語の中心的な意味を図式化すると、図2の通りである。

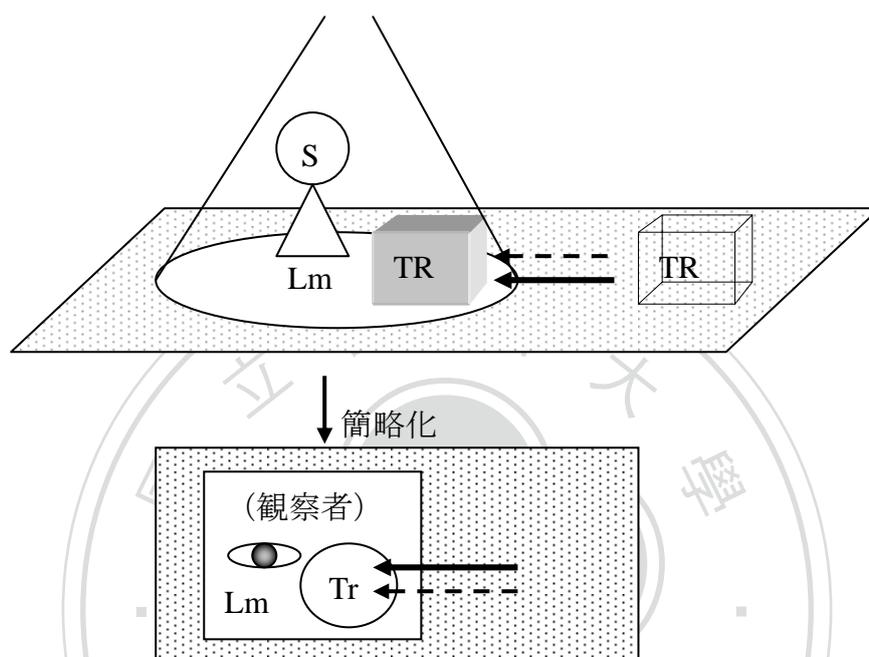


図2：コのイメージ・スキーマ

Tr (トラジェクター) は指示物 (文脈指示の場合の先行詞) である。

Lm (ランドマーク) は話し手の縄張り (話し手の作業、支配できる領域) を指す。Lmの部分だけ、スポットライトを掛け、話し手 (= 観察者) が現場で感知できる領域を指す。

コ系語で指し示す物事の中心的な意味は、ある指示物 (Tr) が収容スペース (Lm) の内側に位置しているということである。

「コ」の時間と空間の関係は、「現場」と「現在」である。それ以外の領域は闇に包まれているように不明であり、話し手の支配できない領域である。

故に、コ系語で指し示されるものには以下の二つが考えられる。

- ①「話し手の縄張りに存在する」物事を指す。近くて観察できる。文脈指示の場合、長い文章のテーマと言い換えがある場合、コが義務的に用いられる。
- ②話者に接近する物事を指す。つまり、元々「話し手の縄張りに存在しない」物事を話し手の勢力範囲に引き込むことである。中立的な文脈に、卓立性を持たせることができる。

3.3 ソの基本義

3.3.1 ソの意味素性— [－話者圏] —

現場指示のソは先行研究を踏まえて、「融合説」、「対立説」またその間に位置付けられる「曖昧距離」の使い分けをそれぞれ分析すると、共通している意味素性として「話者圏外」(－S)を取り上げることができよう。

表3：現場ソの意味素性

	説明	意味素性
[融合説]	話し手の縄張り以外	[－S]
[対立説]	話し手の縄張り以外、または聞き手の縄張り以内	[－S +H]
[曖昧距離]	話し手と聞き手の勢力範囲以外 の中立的な場所	[－S －H]

談話文脈(話し言葉)と文章文脈(書き言葉)の違いは、話し言葉の場合、テキスト内指示はもちろん、テキスト外の指示(現場指示あるいは観念指示)も許されるのに対して、書き言葉はテキスト内の指示にしか使われない。

「談話における文脈指示」の場合、アと対比して、ソは共通領域でなく、観念ではない先行詞を指示することができる。

①非共通経験(久野1973、吉本1992)

談話文脈指示のソ系列について、久野(1973)の一般化を再掲する。

(8) ソ系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。(久野1973:185)

(9) a. A：昨日、山田三郎っていう大学時代の友達に会ったんだ人。

B：[その/*あの]人、かっこいい人？(吉本1992)

b. 昨日、文化庁の山田三郎さんという人に会ったんだ。[その/*あの]人、大学時代の友達でね。(吉本1992)

(9a)の場合、Bが指し示す先行詞は、相手Aが提出した文脈の中にあるため、相手の縄張りとして、「ソ」を使う。

(9b)は話し手が導入したものだが、話し手が聞き手との共通体験ではない限り、話し手が発話する時点で聞き手の知識が共通認識であるかどうかは確認できないので、新規導入として、単純な前方照応(非現場)の「ソ」を使う。

②概念知識(黒田1979)(非直接知識)

アは直接知識であるのに対し、ソはその反対で概念知識であるとしている。例(10)は観念対象指示とも考えられる。

(10) (潰瘍のことが心に浮び)「一体それはどんな色をしているのだろうか。」
(黒田 1979)

③新規導入 (金水・田窪 1990、1992)

金水・田窪 (1990、1992) は談話管理理論の観点から、談話において新規導入された知識は、話し手の実際の経験であるとないと関わらず、経験スペースとは区別する。また未来や非現実世界の事物として導入される要素もソで指し示される、とする。

相手が導入した要素が自分にとって新規情報であった場合、導入者優先の原則によって相手領域指示が発動するとも考えられるし、談話の最初に導入する情報を新規情報指示としてソが用いられるとも考えられる。

「文章における文脈指示」の中、ソ系語しか使えない例文はコ系語と比較して「非現場・非現在」という特徴を持っている。また、現場にも観念にも存在しないゆえ、前後文脈にしか照応できないので、臨時的な意味の付与は先行詞との照応に対して必要不可欠である。

①テキストの意味の付与 (庵 1995、1999)

(11) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。[*この/その]
順子は今他の男の子供を二人も産んでいる。(庵 1995a : 624 再掲)

②非実質 (未来や非実現)、単一文の代行指示 (未完成な文)

(12) 雑誌の内容はその表紙だけで分からない。(作例)

(13) 僕が愛読している堅いことで有名な雑誌があるんだけど、今度[この/
その/φ]表紙になんとヌード写真が使われたんだ。(庵 1995a : 629)

③先行詞との同定が難しい (堤 2002a)

(14) a. 太郎は羊を飼っている。花子は[この/その]羊にえさをやる。
b. 太郎は羊を飼っていて、それを育てて売ることによって生計を立てている。
花子は[*この/その]羊にえさをやる。

④推論による照応 : (寺津 1983、山梨 1992、加藤 2004、馬場 2006)

(15) 投獄された人でなければ、[そこ/その場所/*その家]がいかにひどい
ところであるか実感としては分からないだろう。(馬場 2006、一部加筆)

(16) a. 昨日、×○市で立て続けに四軒の民家が放火された。しかし、その
犯人はいまだ逃走中である。(加藤 2004 : 173)

b. 本日未明、北陸自動車道でバスとトラックの衝突事故があった。し
かし、*その犯人はまだ捕まっていない。(加藤 2004 : 173)

代行指示の場合、照応詞は飽和名詞であるかどうか (堤 1998、2002)、また、
一項名詞であるかどうか (庵 1995 a) によって、制限される故、語彙的な制
限がある言えよう。

それに対し、推論による照応は、照応先は先行文脈に存在しないが、先行文

脈とは無関係ではない。ただ照応を成立させるのは「言外的知識」が必要である。(15)は「投獄された場所＝監獄」という推論ができる故、「そこ」と「その場所」は使えるが、同じ場所を指す「その家」は使えない。投獄された場所から直接推論できない「飯」や「服」なども不適切である。

(15') 投獄された人でなければ、[*その飯/*その服]がいかにかひどいか実感としては分からないだろう。(作例)

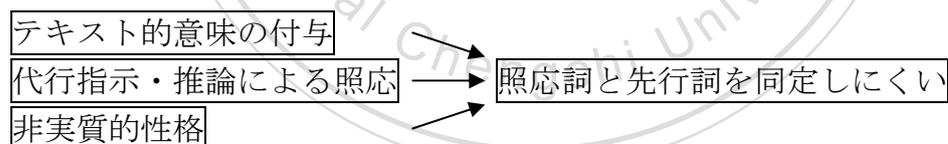
(16) も同じである。「犯人」は庵の定義によると、一項名詞である故、「その」で指すのは適切である。しかし、(16b)は非文となる。その理由は先行文脈の「放火」と「自動車衝突事故」の「言外的な知識」に関わる。「放火」は事件で必ず犯人が存在するのに対し、「事故」はそうではない。

「放火事件の犯人」は合理的であるが、「?自動車衝突事故の犯人」は特別な状況でない限り、成り立たない。つまり、論理的矛盾が表れる。また、(16a)は少し手を加えたら、代行指示か推論による指示かははっきり区別できなくなる。

(16) a'. 昨日、×○市で立て続けに四軒の民家で放火事件があった。しかし、その犯人はいまだ逃走中である。(作例)

「テキスト的意味の付与」とは、先行詞を同定するのに臨時的な文脈関係が必要である、ということである。逆に言うと、照応詞がそのまま先行詞と同定されにくい故、強制的にテキスト的意味の付与が必要になるのではないか。

ソしか使えない「文章における文脈指示」の①～④の共通点を考えると、ソ系語が担う照応詞の特徴はコ系語と違って、まだはっきり分かっていないものを指すことができ、先行詞と同定できなくてもいいという点であると言えよう。



ソ系語の文脈指示は、単なる先行詞を指示するだけではなく、指示機能以外に、「+α」の意味が存在すると考えられる。

ソの「+α」は「話し手に近くない（非現在・非話者圏）」である点で現場性を現すコと区別される。また、「話し手の遠い過去経験ではない（非過去）」という点で、過去観念を表すア系語と区別される。ここからも、現場指示のソの埋め草的な性格が見られる。

以上の使い方をまとめると、次の(17)のようになる。

(17) 現場ソ = [－話し手の勢力範囲 ±聞き手の勢力範囲]
 非現場ソ = [－話し手の時間 ±聞き手の時間]
 ↑非現場 ↑非共通観念

時間的な中距離（非話者時間）とは、現場にはないが、記憶を遡らなければならぬほど離れてはいない。つまり、談話や文章の前後文脈に現れる物事を指す用法であると考えられる。

文脈指示は現場指示と観念指示に挟まれて、二種類の対立が見られる。

(18) a. 文章における文脈指示：「現場コ」対「非現場ソ」

b. 談話における文脈指示：「観念ア」対「非観念ソ」

現場指示では、「コーソ」の対立（対立型）と「コーア」対立（融合型）に分けられる。コは無標の形式であると考えられる。文脈指示では、文章における文脈指示と談話における文脈指示がある。前者は「コーソ」の対立が中心に使われるのに対し、後者は主に「ソーア」の対立であると言えよう。ソが無標の形式であると考えられる。観念指示の場合、「コ」と「ソ」もまったく使えないわけではないが、主に過去経験を表す「ア」系語が使われるため、アは無標形式であると考えられる。

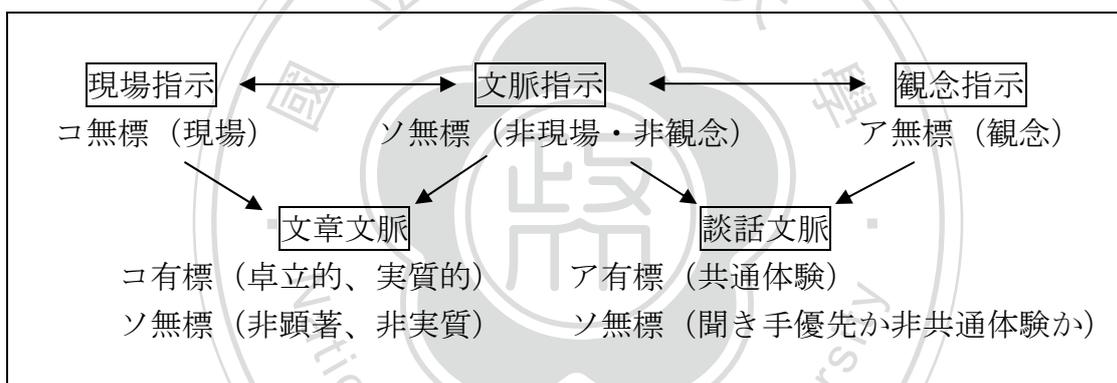


図3：文章文脈指示と談話文脈指示の連続性（筆者作成）

3.3.2 ソの基本義ネットワーク—話者が感知できない物事—

現場ソと非現場ソの連続性を時間と空間の拡張関係から見ると、次のような図でまとめられる。

(19) スキーマ：話者圏外（[遠] [近] と無関係）

プロトタイプ（空間的拡張）：話者圏外の空間（非現場空間）

拡張事例（時間的拡張）：話者圏外の時間（非現在時間）

Tr (トラジェクター) はLm (ランドマーク) の外側にある故、空間的な場合は、話し手から見て中距離の物事と、中距離の領域に属する聞き手の縄張りが考えられる(金水・田窪 1990、1992)。時間的な場合、指し示す物事は「現場」に存在せず、前後文脈に表れる先行詞を指示することに繋がる。

談話における文脈指示の場合は、「まだ確定できない新規導入」と「相手の発言」を指すのに使われる。

文章における文脈指示の場合は、「非実質的」「同定しにくい先行詞」に照応することができ、先行文脈の情報を持ち込むことができる。

故に、このようなソには二つの機能が想定できる。

- ①「話し手の縄張り以外」にある物事を指し示す。
- ②元々「話し手の縄張り」にある物事を外に移動する。

3.4 アの基本義

3.4.1 ア系語の意味素性—[+話者圏内][−近]—

現場指示のアには「話し手にとって空間的に遠いもの」と「聞き手にとって空間的に遠いもの」の二つの要素が考えられる。

表4：現場アの意味素性

	説明	意味素性
融合型 (距離区分説)	話し手にとって遠い物事を指す	[+S (−H)] [−近]
対立型 (人称区分説)	話し手にとっても聞き手にとっても遠い物事を指す	[+S +H] [−近]

談話文脈指示のアについては、久野(1973)の一般化がほぼ定着している。
(20) ア系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合のみ用いられる。(久野 1973 : 185)

「話し手にとって時間的に遠い事柄」(話し手の過去体験)と「聞き手にとって時間的に遠い事柄」(聞き手の過去体験)の二つに分けると、二者の関係は現場指示と類似した結果になる。

堀口(1978)と黒田(1979)は「聞き手消去」の例を取り出して久野説への反論を挙げているが、話し手の過去体験(+S)にあるものが必要最低限の条件であることは変わらない。

まず[+S +H]の場合では、話し手と聞き手に共通の遠方の事物、または共通の体験を指示する。先行詞がなければ、観念指示に繋がる。

(21) A：昨日、山田さんに会いました。[あの/*その]人、いつも元気ですね。

B : 本当にそうですね。(久野 1973)

(22) A : 「あれを持ってきてくれる。」

B : 「はい、承知しました。」(堀口 1978)

[+S -H]のは、話し手がしばし聞き手を無視して過去の思い出を指示する場面である。また非難などのレトリックの用法(例 24)や聞き手が存在しない独り言などの使い方(例 25)もある。

例 23 は聞き手が存在しないかのように振舞うことから、例 25 の独り言に準ずる用法と言える。そして、例 24 の場合、明らかに聞き手が知らない情報を「あの」で指せるのは、話し手が皆知っているはずの情報という気持ちを表したいからである。共通体験の「ア系語」を用いることによって、皆知っているのに聞き手が知らないという意外や非難のニュアンスが含まれる。

(23) (前略)

親鸞 : 九つの時に初めて登山して、二十九の時に法然様に遇ふまでは大
てい彼の山で修行したのです。

唯圓 : その頃のことが思われませうね。

親鸞 : あの頃のことは忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間にま
じめに一すぢに煩悶したのだからな。(倉田百三『出家とその弟子』、
阪田 1971)

(24) A : この本、ミラーという人が書いたそうですが、どこの人ですか。

B : 君、あの先生を知らないのか？(吉本 1992)

(25) (恋人のことを思い出して) [*この / *その / あの]人は、今どこに
いるのだろうか。(吉田 2004)

文脈指示におけるア系語の照応機能にも、先行詞を指示する機能以外に、「+ α 」の意味が存在する。アの「+ α 」は「話し手に遠い(過去経験)」という点で、現場アと連続している。

いわゆる「共通体験」とは、まず「話し手の過去体験」に基づき、「聞き手の過去体験」を副次的に加えて成り立つものであると考えられる。

ア系語は現場指示の場合、空間的に話者(聞き手を含む)から遠く、話し手と聞き手の視線方向を一にするものを指す。

談話指示領域のア系語は、時間の遠(過去の経験)から話し手と聞き手の経験を平等に見る「共通体験」に拡張される。聞き手がいる場合は、「共通体験」の性格が強い。独話、内語のように聞き手がいなない場合は、個人の過去経験「観念指示」の性格が強いと言えるだろう。

以上、現場アと非現場アの意味素性をまとめると、次のようになる。

(26) 現場ア = [+話し手から遠い空間 ±聞き手に遠い空間]

非現場ア = [+話し手から遠い時間 ±聞き手に遠い時間]

↑話し手の過去経験 ↑聞き手の過去経験

3.4.2 ア系語の基本義ネットワーク—話し手が感知できる遠い物事—

現場アと非現場アのスキーマ・ネットワークは以下の通りである。

(27) スキーマ：話者圏に遠い

プロトタイプ：話し手にとって遠い空間（遠い場所）

拡張事例：話し手にとって遠い時間（過去経験）

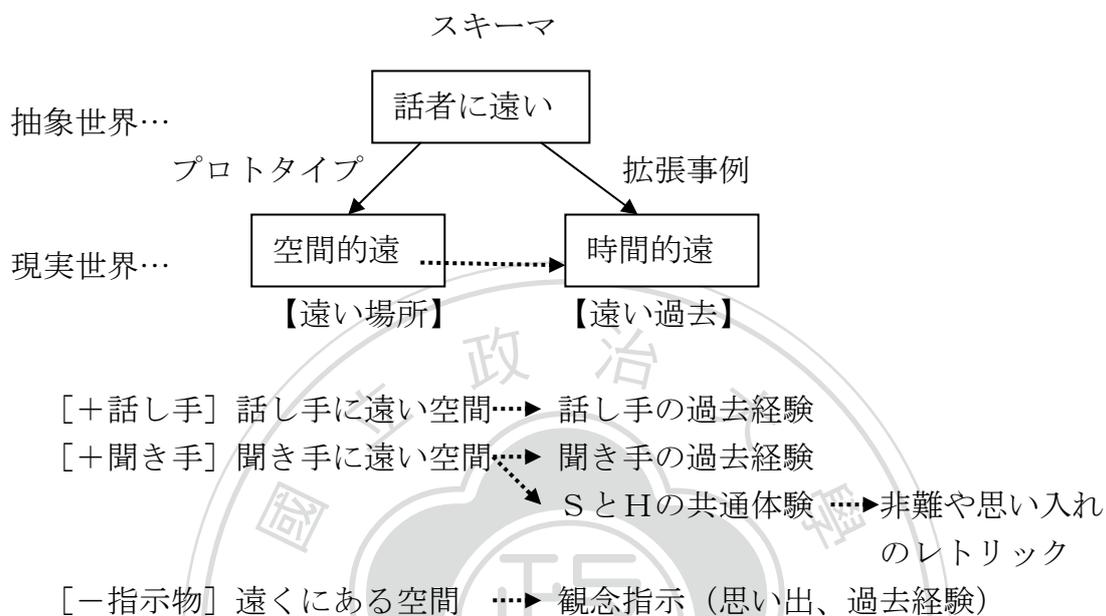


図5：ア系語のスキーマ・ネットワーク

アの意味素性は[+話者圏][−近]であるので、基本義を「話し手が感知できる遠い物事を指し示す」と定義する。指し示す物事は話者圏にある故、話者が観察できるが、距離が遠いため、操作できなくなる。ア系語のイメージ・スキーマは以下の通りである。

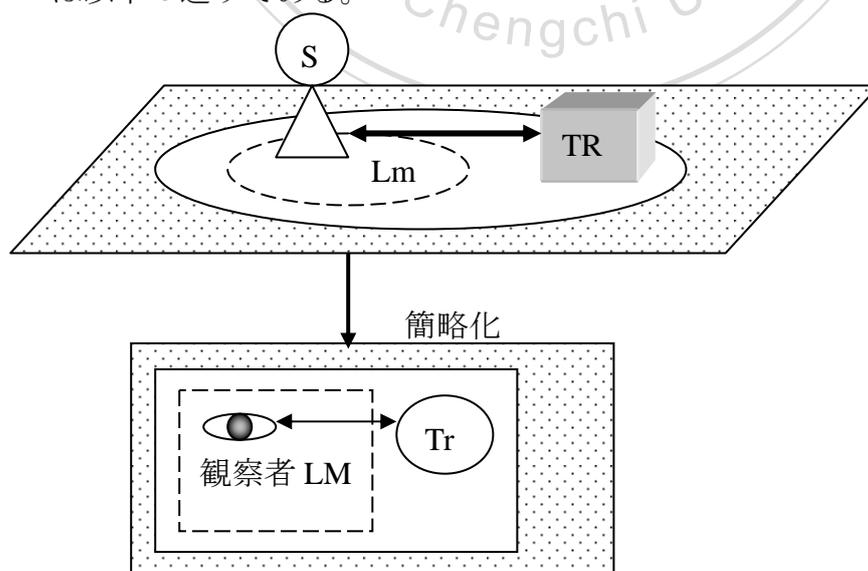


図6：ア系語のイメージ・スキーマ

現場アの中心的な機能は、話し手にとって遠い物事を指し示すことである。そして非現場アは時間的な拡張として、遠く離れている記憶（過去の経験）にある物事を指す。コソアの三つの内、空間と時間の拡張関係は一番明白である使い方だと言えよう。また、話し手の過去体験、いわゆる話し手の「長期記憶」に照応するため、文脈に表れなくても許容され得る。

3.5 おわりに

3.5.1 コソアの基本義

以上で論じたことを、「空間」「時間」「意味素性」「基本義」「無標の使い方」を区別して、表5のようにまとめることができる。

表5

	空間の側面	時間の側面	意味素性	基本義	無標
コ	現場	現在 (現場認知)	[+話者圏 +近]	話し手が認知できる近い物事	現場指示
ソ	非現場	未来と過去 (短期記憶)	[-話者圏 -近]	話し手が認知できない物事	文脈指示
ア	遠方	過去 (長期記憶)	[+話者圏 -近]	話し手が認知できる遠い物事	観念指示

金水・田窪（1992：186）は「聞き手」の知識・知覚などを「間接経験領域」に埋め込まれた二次的領域として規定している。本稿では、「コ」「ソ」「ア」の意味素性を分析し、「話し手」だけは必要不可欠の条件として取り上げる。人称区分説の「話者圏」概念と距離区分説の「遠」「近」関係をあわせて考えると、コソアの区分は以下の図7のようになると考えられる。

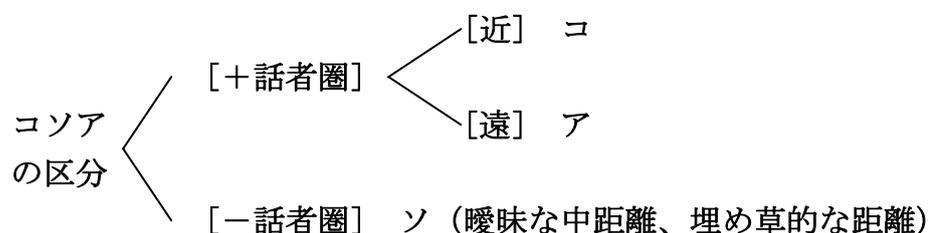


図7：コソアの区分

3.5.2 指示機能を持つコソアの意味拡張—指示機能から照応機能へ—

3.5.2.1 「現場指示」から「文章における文脈指示」へ

現場指示の κ の中心機能は「話し手に近い物事を指示する」ことである。

文章における文脈指示の場合、 κ 系語は単なる照応機能だけではなく、先行文脈が話し手の勢力範囲にあることを積極的にマークすることで、スポットライトを当てるように、先行詞を目立たせる機能も含まれる。

(28) 文章 κ の照応機能＝指示機能＋ α

(α ＝現場性直示性、話者が同定しやすい卓立性を持つ先行詞)

現場指示の σ の中心機能は「話し手の領域外の物事を指示する」ことであるが、文章文脈指示では、先行文脈と後続文脈は何かの関連性を持たない場合（まったく関連性のない後続文脈に付く場合）は、 σ が使われない。 σ 系語が担う照応詞は、先行文脈と同定しにくい故、それを同定するのに、臨時的に意味を加えなければならない。

またその関連性とは庵（1995）の言葉によると、「テキスト的意味の付与」である。

(29) 文章 σ の照応機能＝指示機能＋ α

(α ＝非現場・非現在、話し手が同定できない物事)

3.5.2.2 「現場指示」から「談話における文脈指示」へ

現場指示の α の指示機能は「話し手の遠方にある物事を指し示す」ことである。談話文脈の場合、 α が使われる最低の条件として、「話し手の過去経験」でなければならないので、 α 系語も単なる現場指示だけではない。

(30) 談話 α の照応機能＝指示機能＋ α

(α ＝話し手の過去体験＝「遠」のメタファー)

現場指示の σ は「話し手の圏外にある物事」を指すので、談話文脈の場合は、 σ は「聞き手が提出する文脈を再び提示する」か「新規導入」として「話し手が提出する先行文脈を再び指示する」時に使われる。 σ は「談話文脈指示」と「文章文脈指示」の二つの機能を持つ。

談話文脈指示の場合は、観念 α に対して、「非観念」の性格を帯びてくる。

(31) 談話 σ の照応機能＝指示機能＋ α

(α ＝発話現在ではないが、話者過去体験でもない埋め草的性格である)

指示機能は失われていないが、指示物が現場に存在している具体的な事物から、前後文脈に現れた先行詞や話し手の記憶にしか存在しない経験などの具体的な性格を欠いているものへと変化しているので、 $\kappa\sigma\alpha$ の意味拡張は日野

(2001)が定義している「抽象化」関係と見なすことができる。文脈指示を「文章における文脈指示」と「談話における文脈指示」に分けて見れば、指示機能を持つ $\kappa\sigma\alpha$ は全体的に、「現場指示」、「文章文脈指示」、「談話文脈指示」、「観念指示」の順で徐々に抽象化していくと考えられる。しかし、具体的な指示物

(先行詞)がある故、抽象化過程は最終的に κ の内部にある(概念化過程を持つ)詞に止まると言えよう。

表6：現場指示、文脈指示、観念指示の連続性

内容語（指示機能を持つコソア）		
空間 [+空間 +時間]	時間 [-空間 +時間]	回想 [-空間 -時間]
現場指示	文脈指示	観念指示
①文章文脈指示		
	②談話文脈指示	

現場直示

基本義

指示機能を持つ



過去観念

拡張義（メタファー）

指示の機能が曖昧

